

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR INTERVIEW ^{No} 78

青木保 Tamotsu Aoki

文化人類学者、大阪大学で博士号取得。大阪大学・東京大学・政策研究大学院大学教授、文化庁長官(2007.4~2009.7)などを務めた。米ハーバード大学客員研究員、仏国立パリ社会科学高等研究院客員教授、独コンスタンツ大学客員教授なども務めた。1965年以来、タイ、スリランカなどのアジア諸国、欧米各国等の文化人類学や文化政策の調査研究に従事。1972年~73年にはバンコクの仏教寺院で僧修行をする。日本民族学会(現文化人類学会)会長(1994~1996)。2013年3月には全米アジア学会で基調講演を行った。サントリー学芸賞、吉野作造賞受賞、紫綬褒章受章。近著に『「文化力」の時代』(岩波書店)、『作家は移動する』(新書館)、『文化の翻訳』(新装版 東京大学出版会)など。2013年4月から現職。現在国立新美術館研究紀要にアメリカの画家、エドワード・ホッパー論を掲載中。

落合陽一 Yoichi Ochiai

1987年東京都生まれ。筑波大学情報学群情報メディア創成学類でメディア芸術を学び、東京大学で学際情報学府にて博士号を取得(学際情報学府初の早期修了者)。2015年より筑波大学助教。映像を超えたマルチメディアの可能性に興味を持ち、映像と物質の垣根を再構築する表現を計算機物理場(計算機ホログラム)によって実現するなど、デジタルネイチャーと呼ばれるビジョンに基づき研究に従事。情報処理推進機構より天才プログラマー/スーパークリエイター認定に認定。World Technology Award 2015年、世界的なメディアアート賞であるアルス・エレクトロニカ賞受賞など、国内外で受賞歴多数。



クリエイターインタビュー『デザインとアートの街の10年と、10年後。』



特区による“緩和”と文化的“規制”でここにしかない街と街並みを。(青木)

街の風景を変えるくらいやばい体験をつくりたい。(落合)

photo_tsukao / text_kentaro inoue

2007年1月には国立新美術館、同年3月にはサントリー美術館や21_21 DESIGN SIGHTがオープン、森美術館を含めた六本木アート・トライアングルも10周年を迎えます。記念すべき対談のゲストは、国立新美術館長の青木保さんと、六本木で生まれ育ったメディアアーティストの落合陽一さん。この街に造詣の深い2人が、六本木の過去と未来、アートの役割について語ります。

どの文化にも属さず違和感しかない街。

落合陽一(以下、落合) 東京ミッドタウンがオープンした10年前っていうと僕は19歳、懐かしいな。もう29年、六本木に住んでいますから。街の雰囲気がからっと変わったのが2003年、六本木ヒルズがオープンしたあたり。そこから世間の認知度がものすごく上がって、とにかくお金持ちが住んでいるみたいな印象に変わってしまっ。

青木保(以下、青木) ヒルズ族ですね。

落合 僕は麻布台に住んでいるんですけど、そういう昔ながらの街の印象と、土地の印象が乖離してしまっ。でも、防衛庁の跡地が東京ミッドタウンになって、街の雰囲気がまた変わって、その乖離がだいぶ減ってきた印象はあります。

青木 防衛庁のあたりは、夜は真っ暗だったしね。

落合 檜町公園は森林でした。沼みたいな池があって、よく釣りをしていたんです。

青木 僕は、アマンドができた頃から来ていますから、落合さんとは半世紀くらい違うみたいだけれど(笑)。当時、明治屋のあたりにルコントという洋菓子屋さんがあって、僕はそちら派。よくそこに行ってお茶を飲んで、洋菓子を食べて。あと、六本木はジャズのライブハウスが多かったので、70~80年代を通して、よく来ていました。

落合 今も明治屋の裏あたりとドン・キホーテの裏のあたりって、すごく雰囲気似ているんです。今でも未開拓というか、あれがたぶん僕の中にある六本木のナチュラルな風景。

世界で一番好きな街を聞かれたら、やっぱり六本木って答えると思うんです。西洋感もないし、東洋感もない。どの文化にも属してなくて違和感しかない。相当変わってますよ、ここ。

いい街の条件は、歩いて回れるかどうか。

青木 文化的にも、サントリー美術館や21_21 DESIGN SIGHTができて、よりイメージが変わりましたよね。この街をずっと見ていて感じるけれど、やっぱり今が一番いいんじゃないかなあ。

ただ一点、道路はいただけない。六本木交差点から飯倉方面に行くのも、国立新美術館に来るにも、歩道が狭くて人がいっぱいいて、ぶつかってしまう。私は昔から、いい街の条件は「歩いて回れるかどうか」だと思っています。

落合 ヒルズ側からミッドタウン側に渡るのも、本当に面倒くさいし。たとえば渋谷には、そういう分断がなくて、表参道から渋谷まできれいに店がつながっています。でも、六本木はとこところ空白地帯があるんですよ。

青木 六本木のいいところは、盛り場を含めて、あまり1カ所に固まっていないところ。停滞してなくて、流動感があるというか。だからこそ、まず道を通りやすくしてもらわないと。カフェにしても、レストランにしても、もっと路上に飛び出したらいいし、気軽に座れる広場もあっていい。

私は、ここへ来る前は青山学院大学で教えていたんだけど、骨董通りから渋谷へ向かうところが壁しなくて、夜真っ暗なんだよね。「壁なんか取っ払ってオープンカフェをやったらどうですか?」って、さかんに言ったんだけど誰も関心を持たない(笑)。六本木も同じで、やっぱり人が来やすい、過ごしやすい街角じゃないと。



サントリー美術館
1961年に開館し、2007年に現在の東京ミッドタウン内に移転。国宝、重要文化財を含む約3,000件を所蔵し、日本美術を中心とした企画展を開催。3月12日(日)まで「コレクターの眼 ヨーロッパ陶磁と世界のガラス」を開催中。

六本木をアジアのアートマーケットの中心に。

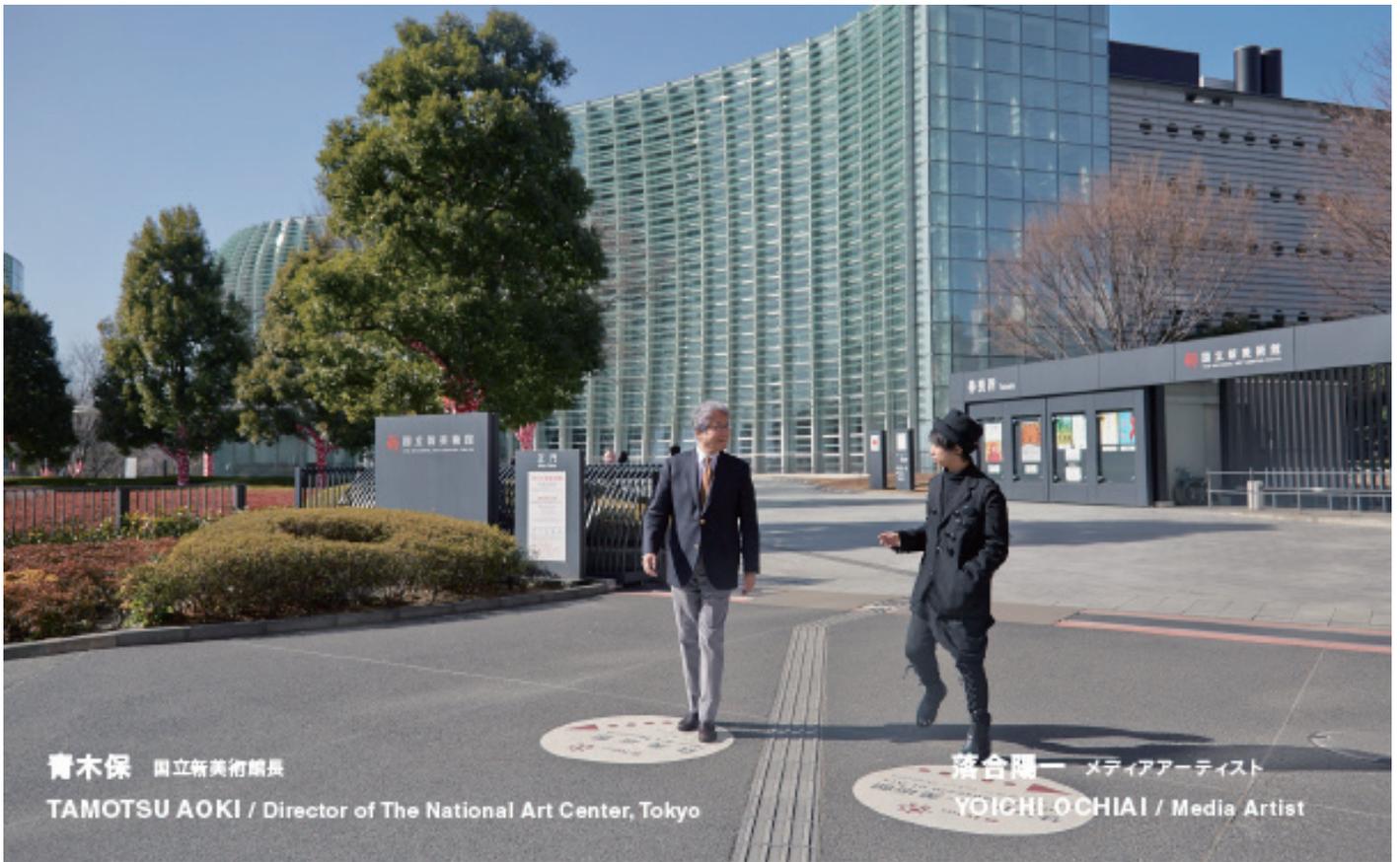
落合 個人的には、六本木はもっと国際的な文化発信感を押し出していけばいいんじゃないかなと感じています。この街って独特で、バブルのカルチャーと外国のカルチャーが両方とも残っている。それをもっと生かしていけば、他の街とは全然違うストーリーをつくれるはず。

青木 数年前、雑誌に「六本木文化特区論」について書いたことがあります。税金をはじめいろいろな規制を緩和することで、文化施設やアーティストのスタジオ、またアニメや漫画のオフィスなどを誘致して、文化的な創造が生まれる街にする。残念ながら政策としては採用されませんでした。21世紀の文化創出拠点としては、東京の中では六本木以外にはないな、と感じて。

落合 そう思いますね。だって、東京の中で一番ニューヨークっぽいですから。タワー系の建物には外資系の投資銀行やコンサル会社が集まっていて、お金はものすごく動いているし、いろんな人種がいるし。

世界のアートマーケットの中心ってニューヨークじゃないですか。そのアジア版をつくるとしたら、後発ですが、今でもこの街はけっこう適していると思うんです。ただギャラリーの数が少なく、アーティストが展示する場所もあまりないし、アトリエを持てるかといったら家賃が高すぎて、ちょっと難しい。

青木 そこで、特別に安くできますよ、ある程度自由にできますよと言えたら……。日本人だけでなく外国人も呼び込めると思うんだけど。



photo_tsukao / text_kentaro inoue

この街には、風景が変わるほどやばい体験がない。

落合 地方の芸術祭のようにコミュニティとアートを結びつける発想とは全然違って、六本木はもっとニューヨーク的でいい街。街はもう十分おこされているから、そういったアート経済文化をどうやって集積するかが重要で、スタンダードなアートの価値をつくることを目指していいはずなんです。

国立新美術館をはじめとする文化施設はもちろんないといけないけど、それは一般の人がアートと出会うための場所。もっとエッジな人がアートに触れたりアートを買ったり、100万円くらいポンと金を払ったりできる場所がないんですよね。

青木 以前、京都の国立博物館がカルティエの即売会みたいなことをやったところ、大成功したらしいんです。いわゆる富裕層を顧客の中心にして。実は個人でアートのためにお金を大きく動かせる人がいないと、マーケットは発達しない。ただ日本にはそういうお金持ちが少ないし、特権的なことがしづらいから……。そこが日本のよさでもあるのですが。

落合 でも、会社をイグジットして、キャッシュで数十億持っている人って、このまわりにたくさん住んでいると思うんです。そういう人やコミュニティをうまく使って、「六本木をニューヨーク化しよう」みたいなことをやっていくのも、うまくいく気がするんですけど。

青木 これからは東京も、北京や上海などアジアの都市と競争しなくちゃいけないから、他にはない街づくりが必要ですね。東京はおいしい店も多いし、安全だし、利点はいっぱいあるけれど、これっていうスケールの大きな魅力がない。

落合 風景が変わるほどやばい体験がないんですよ。とてつもなくでかい塔があるとか、街の1階すべてをバーにしているとか、他の国だったらありえるじゃないですか。でも、この街は全部がこじんまりしている。

青木 落合さんが言うような21世紀型の都市をつくるなら、日本でできるのはここしかないでしょう。私自身、国立新美術館の館長を引き受けたのもそれが理由で、新しいし、コレクションもないし、これはいいなと思って。六本木はやっぱり新しいことを取り入れて、未来に向かっていくことができる場所ですから。



現代の美術館は、建物自体が美術品。

青木 美術館の世界的な傾向として、まず建物が美術品である、ということがあげられます。国立新美術館が黒川紀章さんに頼んだように、みんな競って優秀な建築家にデザインしてもらおう。あるとき、外国人のご一行が正面玄関のところで写真を撮っているんです。寄って行って「中で展覧会やっていますよ」って言ったら、「中はいいです」って（笑）。

スペインのビルバオという街は、フランク・ゲーリーの設計したグッゲンハイム美術館が評判になって、一躍文化都市として有名になり生まれ変わりましたし。

落合 あれは、やばいですよね！ シルエットが尋常じゃない。銀ピカのとんでもない建物が目に入るだけで、普通の路地が異世界に変わりますから。

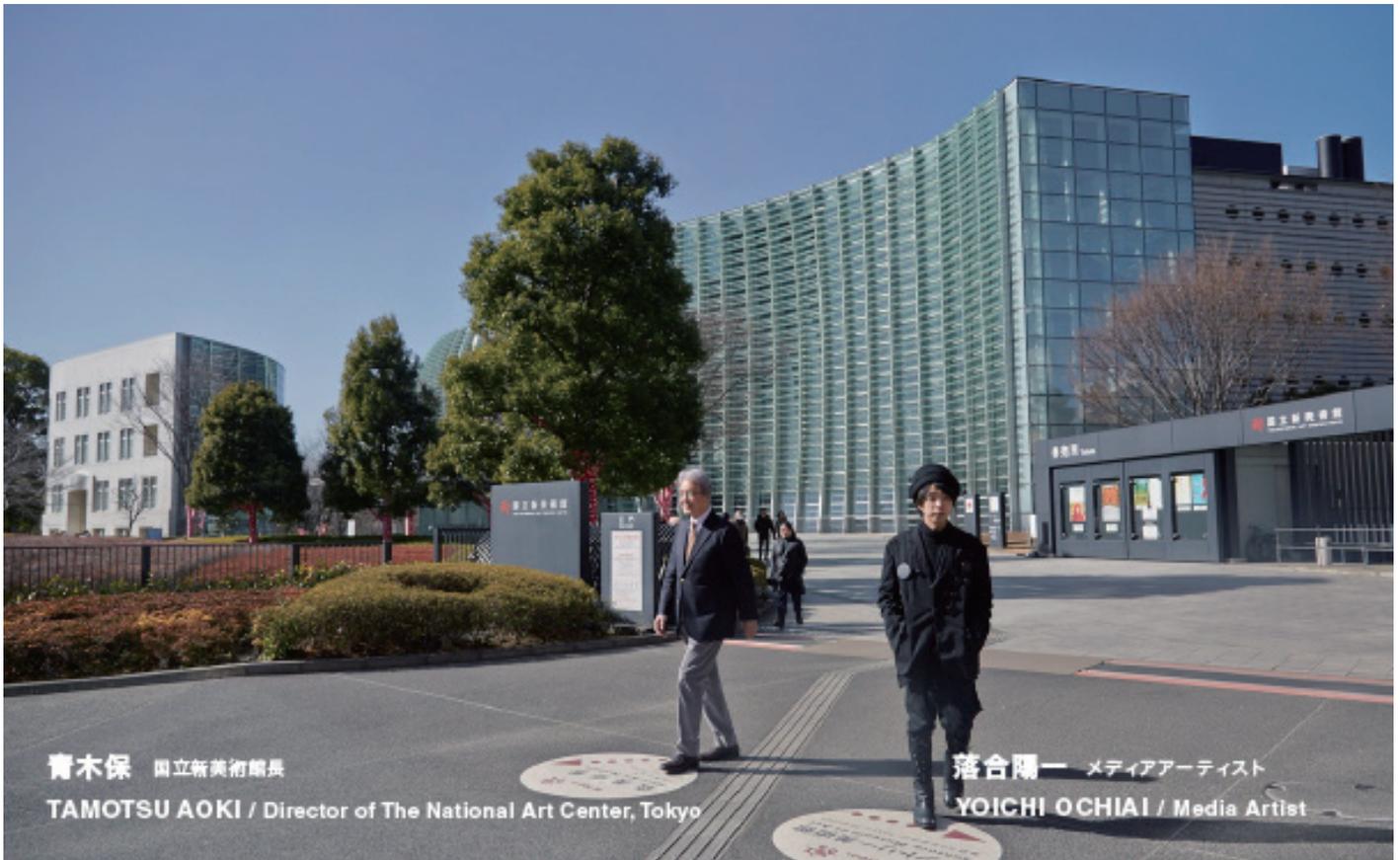
青木 三宅一生さんから「デザイン・ミュージアムをつくりたいけれど、なかなか新しいものを建てる場所がない」と言われたことがあって、そのとき私は「だったら、国立新美術館の建物のまわりに巨大な柱をつくって、その上に新しいデザイン美術館をつくったらどう？」なんて答えました。夢物語に聞こえるけれど、半ば本気でもあって。

落合 実は、僕が学生時代によく授業を受けていた東京大学工学部の2号館って、そうやって建築されているんですよ。もともとの建物を活かしつつ、新しい建物を上にボンと置いた。クレイジーで最高のデザインだと思います。だから、ありえない話ではないですよ。

ちなみに、ここ最近、六本木にできた建築物の中で一番謎だったのは、ドンキのビルの上のジェットコースター。あれは全然美しくないけれど、めちゃくちゃ目立つ。ランドスケープを変えるような象徴的構造物があるだけで、街の雰囲気ってがらっと変わるんですよ。

青木 もし落合さんが、六本木に何か建てるんだったら……。

落合 でかい、やばい、見たことない、言葉じゃ表現できないみたいな（笑）。



photo_tsukao / text_kentaro inoue

目抜き通りの空中に絵を描きたい。

青木 この間、ミラノでクリストの講演を初めて聞いたんです。彼の作品は、建造物を全部布で覆ってしまうもので、実は空から全体を見るとものすごく美しい。しかも景観の中にきちんと収まりながら光彩を放っている。日本では規制が多くて難しいらしいけど、たとえば六本木でもそういうことをやったらどうかな。

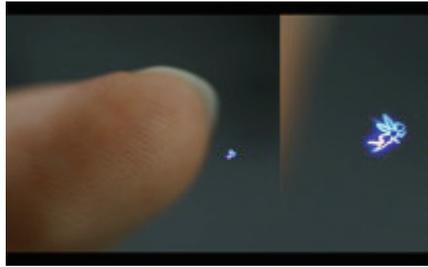
落合 僕は空中に絵を描きたいんですよね。「Fairy Lights in Femtoseconds」という作品があって、お金があれば、もっとでっかくできるんですよ。どこかのお金持ちが数億くらい使ってくれたら、六本木の目抜き通りの上に、「なんかいつも光って浮いてる構造物あるよね」という状態をつくれるんですけど……。

青木 六本木は地縁的なしらがみがないから、やりやすいんじゃない？

落合 そうですね、たぶん法令さえ適切にクリアすれば、地元からは怒られたりはしないと思います。ドンキの上のジェットコースターは反対されて動かなくなったけれど、他はたいてい大丈夫でしたから。何が建っても、そんなもんだろって納得する。寛容なんです。

青木 インドに、建物がすべてピンクの街がありますよね。たとえば六本木も、指定の色以外は使っちゃダメにするとか、チェーン店にしてもアーティスティックなものを取り入れなければいけないとか。同じスターバックスでも、六本木に出店するとなったら、それだけの覚悟をもってやってもらう。

新しいものをつくろうとするなら、ある意味、文化的な"規制"をしなくちゃいけないんですよ。パリなんて、アパートの窓ひとつ壊れても勝手には直せないでしょう。だから街並みがつながるし、世界から街を見にやってくる。



Fairy Lights in Femtoseconds

レーザーでプラズマを発生させ、空中に三次元の光の像を描く仕組み。落合氏の研究チームが2015年に開発し、YouTubeなどでも大きな話題に。2016年には、アルスエレクトロニカのインタラクティブアート+部門で入選。

お台場はガンダム、六本木は現代アート。

青木 ニューヨークをはじめ有名な街って、ひと目でそこがどこの街かわかりますよね。だから、六本木も世界の人がパッと見てわかるようになるといい。

落合 そう、この街は裏通りから写真を撮ったときに、歌舞伎町なのか六本木なのか見分けがつかない。ここが六本木であるというアイデンティティがないんです。

青木 新美も東京ミッドタウンのほうから来ると、建物が見えないのが悔しくて。だから、風船でもシンゴジラでもいいけれど、そういうのでかく空に浮かんでいて、お客さんが「あれなんだろう?」と驚いてやってくるようになったらいいなと(笑)。

落合 たぶん、お台場ならガンダムやシンゴジラで、六本木なら現代アートなんでしょうね。そういう意味で、森ビルさんがママンつくったのは英断だと思うんです。あの銀色の塔だけが建っていたらディストピア的な光景ですが、やつがすべてを引き受けている感じがして。

六本木にはもっと変なものを増やすべき!

落合 六本木のランドスケープといえば、昔は街角から見える東京タワー、今は東京ミッドタウンと六本木ヒルズですが、どちらもありえないビジュアルじゃないですよ。ロアビルの並びのロボットが飛び出したカラオケ Zone も、金属感があって不思議だったホテルアイビス六本木の1階もなくなって、普通になっちゃった。今やポケストップで見れるくらい。

空いている土地はだいたい駐輪場か駐車場だし、そういう土地の使い方が、街のブランド価値を低下させていることに気づくべき。そう、六本木にはもっと変なものを増やすべきですよ!

青木 それが可能だって期待させてくれるのが、六本木のいいところかもしれませんね。

落合 他の街では絶対できないですから。これからいくつか再開発があるので、それに合わせて、ありえないようなでかいものをつくったらいいと思うんですけどね。

青木 落合さんあたりに頑張ってもらって、小学生から老人までいろんな人を集めて、これはいい、これは悪いって街並みを評価をするワークショップをやったら面白いかも。

落合 あとは、六本木交差点のソフトバンクの上にある広告がすごく目立つので、池田亮司さんがタイムズ・スクエアでやったインスタレーションみたいなことができれば面白いだろうな……とか。そういうランドスケープを変えるものがあると、みんなの意識も変わるんですよ。

アートの役割は「非言語の装置」であること。

落合 僕は、アートの役割って「非言語の装置」だと思っています。たとえば、フランク・ゲーリーの建物は明らかに非言語の装置として機能していて、どこからも見えることで街をアートにしている。

まだ六本木には、その装置がないので、どうやってランドスケープをたくさんつくっていくか、どうやって街全体をインスタレーションにするかが、これからの課題でしょう。国籍や人種を問わず、誰が見ても訴求力があるもの。国際色豊かな六本木のバックグラウンドにもハマると思うんです。

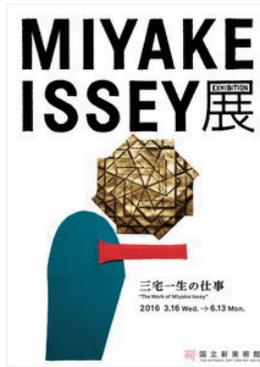
青木 六本木に行けば、世界のどこでも見られないものに出会えるってアピールすることも大切ですよ。昨年「ルノワール展」を開催したときに思ったんです。たとえば、アメリカの観光客って、夏になるとバカンスでヨーロッパに行って、美術館に行ったりするでしょう？ だから『ニューヨーク・タイムズ』に、「今年の夏、ムーラン・ド・ラ・ギャレットは東京で見よう！」って広告を出せばよかったって。

「MIYAKE ISSEY 展」にも世界中から 2 万人くらいの人がやってきて、「東京が文化の中心だ」という感じがしたんですよ。今は訪日外国人が 2,000 万人を超えて、3,000 万人、5,000 万人を目指そうっていう時代ですから。

落合 いいですね。

青木 それから、やっぱり音楽は必要。パリに行くと、地下鉄でアマチュアの人が練習してたり、ギターケースを開けてお金をもらってたり。ああいうのをもっと自由にさせたらどうかなと思うんだけどね。

落合 道は狭いですけど、意外と遊んでいる空間はあるので、できそうですよね。



MIYAKE ISSEY 展

新たにデザインされた「グリッド・ボディ」を用いた展示をはじめ、三宅氏が活動を開始した1970年から約45年間の仕事を紹介した。会場構成は吉岡徳仁氏と佐藤卓氏。2016年3月～6月まで、国立新美術館で開催された。

photo: 「MIYAKE ISSEY 展: 三宅一生の仕事」メインヴィジュアル

美術館はアートを見るだけの場所ではない

青木 社内的なトレーニングのプログラムがあるんですか？

青木 個人的に思うのは、美術館はアートを見るだけの場所ではないという意識を持たなければいけないということ。「安藤忠雄展」(2017年9月)のときには有名な建築「光の教会」を国立新美術館に再現する企画が進んでいるのですが、展示したあともそれを残してもらって、結婚式に使うとか。

メトロポリタン美術館なんかでは実際に結婚式をやっていますから、美術館はこういうものだと思成概念で決めつけなくて可能性を引き出す。将来的には、そんなこともできたらいいなと思いますけどね。

落合 僕のやっている空間インスタレーションって、建築とデザインの間。モノをつくっているわけでもないし、建物を建てているわけでもなくて、その間にある構造をつくるのが仕事です。都市の中にどういった構造やメディアを突っ込むと、人が動くのか。たとえば、巨大なモニュメントとか電光掲示板とか、そういうものの配置を考えていく「ランドスケープベースのアート化」は、もっとやっていかなくちゃいけないと考えています。

それでいつも、六本木ヒルズの展望台から街を眺めては、「あそこの土地空いているけど、誰が持っているんだろう……」なんて、考えているんですね。



落合陽一「Imago et Materia」展

12個の時計とレンズが発光することで、ひとつの奇妙な時間を作り出す「アリスの時間」(写真)ほか、「ゾートログラフ」「幽体の囁き」の3作品を展示。2017年4月11日(火)まで、六本木のART & SCIENCE GALLERY LAB AXIOMで開催中。

取材を終えて

六本木通のお 2 人だけあって、ここには書ききれないくらい濃い話がたくさん（ブログでもお伝えします）。ちなみに現在、落合さんの個展が六本木で開催中。そちらもぜひご覧ください。
(edit_kentaro inoue)